

<座談会>

人物文献書誌をめぐって

出席者 森 陸 彦
 丸 山 信
 石 山 洋

<参考書誌部>

伊藤松彦・住谷雄幸・鈴木重三・熊田淳美
 (発言順)

司 会 編集委員会(安積鋭二・朝倉治彦)



座談中の(右から)森氏、丸山氏、石山氏

はじめに
 『日本人物文献目録』のこと
 時代の流行と人物の評価
 『福沢諭吉とその門下書誌』のできるまで
 福沢書誌の周辺
 日本人の姓名の読みの難しさなど
 これまでの人名辞典など
 外国の例から
 地方的な人物の収録
 人物を主題別に分けることの問題
 資料源のこと——図書の場合
 資料源のこと——雑誌論文の場合
 切り取りのうらめしさ
 人物索引と利用のうらづけ
 『大正過去帳』のこと
 難しい没年などの判定
 正字と略字
 人名のつづり字と読み
 きわめつけの難しさ
 手がかりとしての人物文献索引
 おわりに

はじめに

安積 当館の参考書誌部で『人物文

献索引』⁽¹⁾ 刊行の計画がたてられて、
 まず人文編が刊行されましたのは、昭
 和42年8月でありました。その後、経
 済・社会編が44年3月に、そして、法

律・政治編が昨47年3月に、刊行されましたことは、ご承知の通りです。

この索引は、はしがきに書いてありますように、当館所蔵の各種の邦文資料のうち、人文編については戦後20年間の、また他の2編については明治以降編集時までの刊行物の中から、それぞれの分野について業績をもつ日本人・外国人について、伝記的記事を検索する便を考えて、作成されたものであります。

印刷してみますと、その内容に多くの不備があるにもかかわらず、幸いに各方面から好評をもって迎えられました。3番目の法律・政治編が刊行されますと、早速これ以後発行され続けている資料についての、補遺編の要求が当然出てきます。そこで、これを編集しました3課（人文・経済社会・法律政治の各課）で、この問題について相談したのですが、現実には、いろいろな困難が少なくなく、手がかりをつかむのも、た易くはないことを改めて感じた次第で、話し合いの中からとりあえず、外部の専門家の批評なり意見を聞いてみたいという希望が出たわけです。

そこで、そういう問題について考えていただける人を探してみましたところ、手近いところ法政大学史学研究室の森陸彦氏と慶応義塾大学日吉情報センターの丸山信氏がおられますので、お願いしてご承諾をいただきましたので、本日この会を催した次第です。このおふたりに、当館整理部の石山洋氏

にも加わっていただいて、座談のなかで、伝記とか人物資料の編集上の経験とか、問題点を語っていただくことになりました。

したがいまして、ここでのお話の内容は、われわれの作った人物文献索引の直接の批評というのではなく、一般に伝記資料とか文献索引を作る上でどういう問題があるかというような点が主となるかと思えます。こういう座談会は、従来にない企画と思えますが、この種の作業を計画中の方にはもちろん、それを利用される方面でも、非常に興味深い記録となると思えます。

まずはじめに、ご自分の仕事についてお話していただきたいと思えます。いかがでしょうか、森さんから。

『日本人物文献目録』のこと

森 私どもの『日本人物文献目録』⁽²⁾の仕事が、どうして始まったかについてから、お話ししたいと思います。

実は、発足は非常に単純でございました。私どもの学校の大学院で、ある研究会が百回に達しましたときに、何か記念に論集を出そうかということが学生から出ましたところ、主任の教員が海外交渉史の岩生成一で、かねがね欧米に比較して日本の人物研究が遅れ、とくに関係文献目録類が不足していることを指摘していまして、論集も結構だが、この機会にこれをやって見ないかと提案して、岩生が東大に在任中に編集した学会会議の『文科系文献

目録』の第14「日本近代史・伝記篇」⁽³⁾を見本として、もっと網羅的なものを作ろうということになりました。そして、昭和41年7月から大学院生と院卒業生とで委員会を作って作業が始まり、以後組織の改変はありますが、今日まで続いています。その間ご存知の学園紛争がありまして、大幅な遅滞がありました。

明治初年から昭和41年末までに刊行された図書・論文を収集し、当初時代別にして刊行しようと思いましたが、しばらく仕事を進めていくうちに、各時代のボーダーラインをどうするか、大変難しい作業になることがわかりましたので、思い切って全時代込み、また職業別などは考えない総合主義のものにしようということになりました。

教員の希望で、図書だけでなく雑誌論文も入れようということで、人文系の雑誌から雑誌論文の採集にも着手しました。その上さらに注文がついて、その人の略歴程度は頭につけようということでしたが、これは不可能なことですから願い下げにしました。

だいたい、35,000人分、12万件の文献カードが整理を終り、四六倍判、7ポ、縦3段組で、1,200頁になると思います。

この間、私がほぼ専任のようになり、学生の助力で採集・配列を実施しましたが、学生諸君の好意による形では出欠が常ならずで、常勤の手がどうしても必要となり、家庭人・学生アルバイトを雇うことにふみ切りました。

出席者紹介（発言順）

もり・むつひこ氏
法政大学史学研究室
まるやま・まこと氏
慶応義塾大学日吉情報センター
テクニカル・サービス課長
いしやま・ひろし氏
当館整理部分類課課長補佐

校正はパートの家庭の主婦とアルバイト学生各1人、計3人で2ヵ年近くかけて実施中です。

二次文献で186種類を主体として、それに人文系の雑誌や紀要類と各分野の主要な雑誌からも直接に採集しました。雑誌類のタイトルは714ほどです。直接といっても総目録があるものはそれを使いました。40万枚程カードを作り、個人別に排列して、重複は捨てました。

作業上の反省としては、この種の目録編成の基礎としての道具類、たとえば特殊部門の辞典類・地方の人名録が常備できなかったことは、作業の能率を低下させました。それも後半紛争をさけて、平凡社にお願いして、関連会社に仕事机を拝借して学外に出てからこの点は特に感じました。また、二次文献を主体として採集した点と、作業者の質と申しますか、図書館学の受講者も少なく、学業なかばの者が大部分でしたので、基本になるカードが充分信頼できるものばかりでない凸凹ができてしまったりしました。

それに個人の能力には限界がありま

す。諸部門の専攻者によるチームで作業することが、最も望ましいことなのですが、充分な体制が作れなかった等々の基本的な不備が多分にございですが、全時代を通し、部門も網羅、雑誌論文にも力を入れたという新しい面もあります。近々に刊行できそうですから、ご批判を頂きたいと思えます。

安積 正式な書名は何といいますか。

森 『日本人物文献目録』です。

日本では、人物文献索引は、4、5点ほどしかありません。日比谷図書館の『伝記資料索引』⁽⁴⁾、昭和10年に出版された高梨光司さんの『維新史籍解題 伝記篇』⁽⁵⁾、それから「明治以降 文献目録」⁽⁶⁾、これは『日本歴史』138号に出たものです。それから先の『文科系文献目録』、これは近代史関係です。それに、こちらの『人物文献索引』の5種ぐらいだと思います。あと部門部門では、社史・経営者の伝記⁽⁷⁾が、東大と一橋大から出ています。

安積 一番役に立ったものには、どんなものがありますか。

森 それぞれに特徴がありますね。日比谷のものは、叢伝・列伝類を非常に細かく分轄して入れてあります。雑誌論文も加えてあり、人名は仮名標記があり、そして肖像も明示してありますが、発行所と刊行年がなく、細分されすぎています。高梨さんのものは、時代・分野が明治維新に限られていますが、各書に解題がつく点は他に例がありません。『日本歴史』のは、帝国

図書館目録から集めたものらしいのですが、書名・著编者・刊年しかありませんが、調査の目安にはなるでしょう。

『文科系文献目録』は、近代史部門で高梨さんのものの後を埋めるものですが、図書と少し雑誌を含め、解題はありません。ぎっしりとつまっていて、検索しにくいですね。でも、それぞれ全部吸収させていただきました。

時代の流行と人物の評価

朝倉 森さん、それをおやりになって、戦後の歴史研究の中で、ここでは伝記研究ですが、戦後なりの特長があると思われるんですが、どうですか。

森 結局、人間にも流行があるということは感じます。神武天皇等は、ほそぼそとありますね。礫茂左衛門、佐倉宗五とかは、史観は違いますが続いている。はっきりいって、時代の波というものは、集めた文献に感じます。

朝倉 戦前の評価とは、また違った評価となったものがありましょね。田沼意次などは、少し変わった形になってきますね。

森 それは確かにあります。単なる英雄が分析されたり、英雄ナントカ主義から、新説 ナントカという形になり、書く方にも変化がありますね。

朝倉 戦前、悪玉と見られていた者が、善玉と見られたり。このところ、歴史ブームが続いており、司馬遼太郎が書いたりなどして見方も変化してますね。たとえば斎藤道三。また別に、

学問が流行の影響を受けて、本当は左右されたりしてはいけないのですが、研究の結果がある程度世間に迎えられるということは、はげみにもなるという点もありますしね。

森 それは確かにそうですし、逆に学者が学問のために、本当のことを書けるかという、出版の基本的なことにもかかわってくるのではないかと思います。

『福沢諭吉とその門下書誌』の できるまで

安積 それではつぎに、丸山さんのお話を。

丸山 私は、あなたの専門は何ですかといわれると、非常に困るのですね。国会図書館のような、大きな組織で、多くの専門家をかかえているこういう会に呼ばれて、お話することがないのではないかと思います。ただ、こんな書誌作成に興味をもった動機から話を始めましょう。私はここ20年という間——図書館歴20年ですが、何をやってきたかと考えてみますと、たまたま一般参考、いわゆるレファレンスの仕事をやってきました。その間いろいろ感じたわけですが、結局、いま森さんがおっしゃったように、日本の伝記関係の資料を考えてみますと、非常に資料がありそうでいて、記事を探すとみると、ちゃんとなっていない。資料不足ということを非常に感じました。

たまたま勤めて5年ほどたった時、

慶応義塾が昭和33年に創立百年記念として、いろんな事業があり、そこに私のレファレンスをしていた間にとっていた、慶応義塾関係の人物に関する伝記著作などのカードが、たまたま「文献目録」としてまとめられ、それが『慶応義塾文献集』⁽⁸⁾ というものになって刊行される契機になったわけです。これが5月に話があって11月にまとめるという、非常に短時間でまとめなければならなかったわけで、当時あったメモ程度のものに、追加したような杜撰なものですが、それでも、「丸山君大変よいことをしてくれた」ということで、公に参考業務の中に書誌作成として取り入れられることになり、大変うまくいったという気がしています。

はじめは、業務内容を教職員の著作はどうなっているか調べたり、福沢諭吉に関する参考質問が多いので、福沢の伝記、著作、さらに慶応を出られた方で、卒業後政界財界また文壇に出ておられる方々もかなりおり、これらの3つの柱でもって、関係文献をまとめてゆけばよいのではないかと考えてやったところ、この資料集みたいな形でできたわけです。そんなことから刊行したため、『慶応義塾百年史』⁽⁹⁾の付録・資料集のようなものになったわけです。

こんな動機で、人物に関することが私の興味の対象となってしまったわけで、もっぱらそんなことでやっている間に、伝記関係の書誌や人名録、人名辞典などの参考図書、辞典にはどんな

ものがあるかとか、種類、欠点、長所を自分なりに学んだということでした。

それから、たまたま慶応義塾に、福沢諭吉を記念した、「福沢諭吉学事振興資金」というのが設置されまして、その趣旨は、外国へ慶応義塾のいろいろな業績を発表するに意義ありと認められたものや、あまり学術的で市販にならない出版物に対して補助するわけで、だいたい50万から100万出してくれることになっているので、そこに何回か申請したら、これにも通って第2のチャンスができて、ご存知のような『福沢諭吉とその門下書誌』¹⁰⁰というのが274頁ですが、慶応通信から昭和42年に出ました。先輩の意見を聞いたのですが、そのねらいは、それまで、福沢自身の研究については十分とりあげているので、今回は、慶応義塾が百年続いたのは、門下生に優秀な人がいて、慶応を大事に維持してくれたその影響があったと思われまますので、その事実を顕彰することが第1ではないかということで、功労者の略歴とか著書とか伝記資料を個々に調べて303人位になりました。

参考図書の種類からいうと、長沢雅男さんは、彼の著書で集合書誌と呼んでいます、そんなような名称のものができたわけで、学生（慶応では塾生と呼んでいる）にとっては、どの先生がどういう本を書いている、論文を書いているということがわかるので、講義と結びついたり、先輩から見れば、

親父のことがでている、じいさんのことがでているというわけで、人物についての資料としても、話題としても、非常に意義があったのではないかと思っ、て、まあまあ、こういう方面に深入りするようになったわけです。

『福沢諭吉とその門下書誌』の構成は、第1部に福沢諭吉の著作、56タイトル、152種類の本。研究文献として1,281タイトル。第2部を門下生303名の著作と略歴をのせ、4,340タイトル。参考文献として、1,154タイトル。合計6,775タイトルを収録しました。索引には、福沢諭吉著作書名索引、研究文献を執筆者から引ける索引、門下生の氏名から引ける索引をつけました。

福沢書誌の周辺

朝倉 丸山さんね、編集する途中で、一番役に立ったものは、やはり門下生の名簿ですか。

丸山 そうですね。塾史編集所が慶応にありまして、そこで出身者のことを調べているわけで、私自身ずいぶんそこで勉強させてもらい、基本資料として、図書館に保存されていた『慶応義塾入門姓名録』¹¹¹というものを、コピーさせてもらい、それを座右の書として、人物調査を開始しました。これが私の書誌の人物選定のもっとも重要な資料となったものです。内容は、もっとも古いものは文久3年春から始まり、第一番に入ったのはだれで、どこ藩で、親父はだれ、入門年月日はい

つといったものです。

朝倉 紹介者も。

丸山 それもあります。

朝倉 緒方洪庵の適塾のに似てますか。

丸山 そうですね。

朝倉 何年まで記載されているのですか。

丸山 福沢先生は、明治34年2月で亡くなるのですが、その年の11月で終わっています。そのほか『医学所入社帳』『法律学校入社帳』『幼稚舎入社帳』などありまして、そんなものを参照したわけです。

朝倉 仕事を進めている間、新しい資料を発掘なさったのではありませんか。

丸山 そうですね。まあ、そんな意味で、私は図書館屋なんだか、歴史家なんだか、その間をいったりきたりしているのですが。

朝倉 そんなもんですよ。図書館屋は私も含めて。(笑)

いろいろお使いになったものでも、従来あまり使われてなかったものも大分あるのでしょうか。たとえば絵の入っている演説家だけ集めた本がありますね。

丸山 たとえば、『銅版絵本英名百首伝』⁽¹²²⁾など絵が入ったり、和歌が入ったり、詩が入ったりしていますが、そんなものも興味を持ちましたが、最も心をとられたことは、入門帳にある人がその後どうなったかということが少しもわからず、いろいろ探していく

うちに『国民過去帳』⁽¹³⁾が出てきて、これは大変な人名辞典でした。最近復刻されて『明治過去帳』⁽¹⁴⁾になるわけで、あれなんか2万人位収録されて、それが亡くなった順に並んでいるのが特長で、それがかなり、こまかい人物、普通の人名辞典に出ていない、貴族高官以外の市井の人まで出てくるということで、役立ったと思います。これは『大正過去帳』⁽¹⁵⁾までやろうということになった契機です。

朝倉 発展したわけですね。

日本人の姓名の読みの難しさなど

丸山 それが、一般的にいうと、日本の人物研究とか、こういう人名録とか履歴なんかの、いい本であるか、わるい本であるか、その過程で気がついたので、参考事務で取扱っている参考書などを見ますと、一般的にしか書いてない、表面的ですね。いかにもアメリカあたりのレファレンス・サービスの教科書なんかに書いてあるものを、横のものを縦にしたという感じがですね。もっと、ヨーロッパのものも紹介したり、実際に資料を見たりして、もっと深く突込んだ、こうではないかというような目のつけどころというようなものを見つけなくてはならないと思います。とくに日本人の人物の場合は、読み方自体とか、とくに江戸から明治にかけては、明治のはじめは江戸のなごりもありますから、雅号とか、氏名なんかと非常に複雑で歴史的伝統

や慣習などあるわけですから。それを知らないでずい分失敗します。

維新戦争の折あの榎本武揚と一緒に函館へ行った方で、岡本周吉という人がいますが、この方は一生に4回位姓名を替えていますけれど、それを知らないで、図書館屋が目録をとる場合など、標目がみんな異なるところに排列されて、一人についての著書を全部調べていくとなると、そういう知識がないと、ばらばらに排列されてしまう。それが同一人物であるということがわからないですね。こういう点は、こういう編さんをやる際に気をつけなくてはいけないのではないだろうか。

もうひとつは、日本人は襲名すると同一の名前で、初代何々とか2代の何々とか、またそれも目録の不備もありますが、それを同一人ととりちがえてしまって、著書を年代順に並べる際におかしくなって、再校、三校の時にその事が判明して、また訂正したなどという失敗談もあります。一般的にいうと、やはり、人名録なんかは人名を何にするかという収録の状況が非常に、その文献なり、人名録なりの運命を左右する、いいわるいを決定するものではないかと思えます。

それから、つぎに感じたことは、内容の記事の正確さという時、非常に難しいことですが、いまいったような事実が、書誌を作る人の知識いかんで左右され、優れたものにもなり、役立たぬものにもなりますね。さらに、雅号がわからないために、どういう人物か

もわからないというような、それから襲名する場合、その人を同一に扱ってしまったり、そんなこともあったりして、私の福沢の書誌なんかも、まだ後から指摘されて訂正したのが、ずい分とありました。

朝倉 日本人の場合、姓名の読み方に困難がありますね。それから、江戸時代だと、号とか通称とかいろいろあって、号で通っている場合もあり、通称で通っている場合もあったりで、どれで統一するかということも当然考えなければならぬことでしょう。蜀山人などは、号を10も20も持っている。

丸山 そうですね。そういう場合は、参照をこまめにつけるといことが考えられますね。十分な知識がないと、行届いたことはできませんね。

朝倉 辞典索引は、その背景にかなりの知識が要求されるわけで、たとえば、先日刊行された木村兼葭堂の日記の索引⁽⁴⁶⁾なんかは、大変なもので、どれから引いても出てくるようにしてある。近世の漢学者・芸術家の調査を一方でしていないとダメですね。同様のことは、森さん、感じられたのではありませんか。

これまでの人名辞典など

森 そうですね。まず道具の不足ということを感じましたね。もちろん、自分自身の知識のはばの狭さに、由来しますけれど、まだ人名辞典でしかとしたものがないと思えます。現在

使われているあの平凡社の旧刊本⁽¹⁷⁾にしても、公称日本人は約6万人ですが、実数はもう少し少ないそうです。当時の販売政策として、約6万と称していたというのですね。『暮しの手帖』等が手きびしくチェックして、誇大広告を批難していますが、平凡社から出していただくのに欠点をあげにくいのですけれども、既刊の『大日本人名辞書』⁽¹⁸⁾をそのまま再録しているものが多いのですね。それと、戦後の出版のとき、お急ぎになって、改稿しないで出したのだから、見出しは新仮名ですけれども、地は旧で入っており、二宮尊徳なんか戦前の評価で入っているということで、記事の内容でも評価が変わっているものが多いのではないかと思います。それから、『万葉集』に2首以上のっていると採録するとかで欲しいものが出てなくて、いらぬもの——というとおかしいですが、入っている。あまり、実質的に役立たない場合があります。いま、丸山さんをご指摘になったことですが、同じ人が数ヶ所に入っていることがある。それから、西暦になおすときの計算違いがあることが多い。そういう欠点があります。しかし、欠点があっても、文献がない以上は使わなければならない。ですから、割引いて使うところに難しいところがありますね。

それから、芳賀矢一さんの『日本人名辞典』⁽¹⁹⁾のような、名や号から姓名を引き出すのが日本ではもっと必要ではないでしょうか。類縁のものでは、

『日本歴史大辞典』⁽²⁰⁾が、わりに人名が豊富ではないかと思えますけれども一般に人名辞典になくてとくに困ったのは、宗教人、つまり仏家ですね。無学祖元とか、どこからタイトルにしてよいか、宗派によって号が上にあったり、下にあったり、それから字、慶の読み方とか、慶はキョウとも読むでしょう。現在、慶応の慶が通っているから、慶を正しく読んで下さるかどうか。

通称などで知れている者があって、通称・本名どちらにしたらいいか。とくに困ったのは、宗教家の場合は、中国や朝鮮の方が、同じ漢字を使っているために、入ってきてしまう。鷺尾さんの『日本仏家人名辞書』⁽²¹⁾にない人とか、いろいろ調べてみると、中国人で日本に影響を与えている人なども自然入ってくる。とくに、近世の文芸家などの号の難しさ。

それからもうひとつ困ったことは、官名で出てくる何々守とか、幕末の人でもフルネームで出すことがなかなかできない。『維新史料』を読むと、何々守の書簡というのが出てくる。引き出せるものといえば、『百官履歴』⁽²²⁾位しかない。そういうことで、辞典を作る前に文献が必要である、文献がないから辞典ができないという悪循環になってきます。ですから、そういう意味でも、文献目録ができるということは、重要な意味がありますね。

朝倉 編集している途中でですね、ある程度過去に出ている簡単なもの、

人名録の類がありますね。

森 ええ。

朝倉 そういう人名録をまとめるといことが行なわれているといいなと感じますね。たとえば、江戸の諸家人名録⁽²³⁾など。江戸以外では、京大阪にもあります。これら以外では、名古屋のなどは稀本ですね。そういうものを複製するとか、また『武鑑』⁽²⁴⁾なども複製して、おわりに索引をつける、そういうようなことは、事典編集以前で、行なわれていればかなり違いますね。

森 あればありがたいことですし、必要ですね。日本のことを調べるのに技術がいるようでは、まったく困りものですよ。それで、そういう作業は地道でもしてほしい。出す場合は、ある意味で、急いで出さずに、徹底的に調査した上で、ルビをふってほしい。きめつけをして、そういう材料を作ってほしいですね。材料というか参考書を。

現代の紳士録はルビがないことが多く、われわれの作業には役に立ちませんでした。新聞社の年鑑付録の人名録は、重宝な道具のひとつでした。

丸山 いま、私がちょっと感じたことは、調べていてわからない場合なんか、日本には人名録または人名辞典にはどんなものがあるかと思って、興味を持って調べたことがあるのです。東北大学のどなたでしたか。いい仕事をなさっていますね。

朝倉 官員録の類を集めたものです

か、そのあとの人名辞典類の総目録⁽²⁵⁾ですか。

丸山 あとの方の。

森 矢島玄亮さんの。

丸山 そうです、そうです。書庫で見つけた『国民過去帳』も入っていたので、東北大学にもあるのだなと思ったのですが、いったいこの編者は、どんな人なのか、探したのですよ。

朝倉 大阪でご健在だったのでしょ。

丸山 大植四郎さん。なお、序文をみると、自家出版らしいです。慈恵医大を出て、人物に興味を持ち、墓碑参りをしたり、新聞記事を集めたりして、編集したらしいのですが、自費でやって昭和10年に刊行、記念として饅頭本のように配ったらしく、多少売れたらしいです。一般には流布しなかったらしいのですが、慶応義塾では、時事新報社からの寄贈本の中にあっただけです。東北大学もだれかの寄贈ではないかと思いますが、つまり、これを今回複製したわけなんで、ご存命でなければ、私の名で出ることになったわけです(笑)。序文にその由来を入れましたが。

朝倉 あの本は、柳田泉さんが座右に置いてましたよ。

森 人物文献索引関係の参考書のこと、丸山さんが『日本古書通信』⁽²⁶⁾に執筆されていますね。あれに尽されていると思います。いい批評であり、紹介だったと思います。ただ、丸山さんのように、はっきりと、文献目録は

時刻表と同じに、間違っているとはいけないのだときめつけられると困るのだけれど。

外国の例から

安積 石山さん、何か関連したことで、ご意見はありませんか。

石山 私も外国のことは、よく知らないのですが、伝記索引とか文献目録とかは少ないのではないかと、むしろ、中味のある人名辞典のようなものに、文献目録がついているという形であるのですね。ウィンチェルの『ガイド・ツー・レファレンス・ボックス』⁽²⁷⁾を見ても新しい伝記索引は出ていませんし、先ほど申しましたように、人物の略歴が記してあって、プラス文献目録となっている。それに、外国の場合は「ディクショナリィ・オブ・ナショナル・バイオグラフィ」⁽²⁸⁾があり、桁違いに大きな人名辞典になっていて、自身の著作と関連文献をふくめて相当多くの人を、これで知ることができますね。

森 外国の人は、とくにヨーロッパの場合だけで、教会があるから調べやすいのじゃないですか。

石山 それもあるんだね。材料があるんだね。先月聞いた話に、日本地質構造論をやって、御雇教師ナウマンと論争した原田豊吉が、ドイツへ留学したときの学籍簿や身分証明の写真的原稿まで残っていたそうですから。

森 バイオグラフィの編さん者は、

どういうところですか。

石山 ドイツなんかは、バイエルンのアカデミーなど、国家的な機関がやっています。

丸山 国家的ですね。

石山 どこ国でもそうだという事ではありませんが、国家的な、日本でなら国会図書館でやってもよいのではないのでしょうか。

丸山 とにかく、時間と金を使わなければ、できないのではないですかね。

石山 そうですね。

丸山 国立伝記研究所みたいなものが、国語の研究のために国語研究所があるように、あってもよいのではないですか。

石山 研究所はどうか。何か編さん所があってもよいですね。

朝倉 森銑三さんは、史料編纂所におられた頃、カードをこしらえたんですが、史料編纂所は、なかなか江戸に入っていないからね。

石山 さっき、森さんがいっておられた、朝鮮や中国からきた坊さんで日本人かどうかははっきりしないという例は、外国にもあると思われるんです。そういう場合は、日本の文献目録にも入ってかまわないのではないのでしょうか。

ヨーロッパの場合、国籍が非常に曖昧で、たとえば、アフリカ横断のスタンレーの場合など、イギリスでもアメリカでも、バイオグラフィーが、ナショナル・バイオグラフィーにのっ

る。もともとイギリスからアメリカに移って、アメリカの新聞記者時代にアフリカ入りをして、リビングストンを追跡するわけです。その後ベルギー籍にもなり、有名になったので、イギリスから爵位をやるから帰ってこいと呼戻され、最後はイギリス人になっているのです。国籍は、その間に何度も変って、どの国のバイオグラフィーにも載っている。そういうことは他の国にもあるわけで、古い人の場合、あまり厳密に何国人かをきめつけられないのではないのでしょうか。

森 それと、これとは、ちょっと違うんじゃないかな。日本に来ている場合はいいんですが、来ないで、間接に文献的に影響を与えている場合はどうなんでしょうね。

朝倉 蘭学関係では、外国人で、日本史に深いかかわりあいのある人もいますね。シーボルトなんかそうですね。

森 とにかく、朝鮮や中国から来た人の例では、字も同じだし、論文の書き方も、読んでみても最後まで国籍がわからないんです。

地方的な人物の収録

伊藤 森さんのお仕事の場合、地方的な人物はどのくらいまで収録されていますか。

森 相当重い比重を占めています。各県の県立図書館の郷土資料目録は、佐賀県以外は全部チェックしました。

各県それぞれ収録の範囲とか編さんの仕方が違うので、かなり苦労しましたが、それだけに自信もっています。

こちらの「法律・政治編」は、だいぶ方々に呼びかけてお集めになりましたそうですが、できたものを拝見すると、なるほどと思います。

朝倉 最近では、地方史がだいぶ盛んになりましたが、そういう点、地方の関係の深い伝記は、以前より増えているのでは。

森 それと私たちの使ったのは、だいたい30年代の刊行のものが大部分でしょう。明治百年その他で、40年代にふたたび郷土資料の再編成というのが出て、地域協力で県下の地域総合目録というのが、このごろだいぶ増えている。もし、集められるのなら、そういうもので改訂したいと思いますね。

それに、だんだん、単なる図書・単行書、1人について1冊になったものでなくて、叢伝類を内容細目を出して、たくさんの人を分出すとか、あるいは雑誌の郷土人に関する記事を出すとか、あちこちでキメ細かく拾われているのが多くなっています。たとえば、岐阜県・富山県等のものなどがそうです。そういう作業が進められている。拝見していて非常に頼もしい。ここまで手がまわるようになって来たのかと思います。

人物を主題別に分けることの問題

石山 そういう意味では、何か主題

別というのは、あまり意味がないと思うんですが。

森 その点で人間を主題で分けられるかどうか、非常に難しい問題だと思います。NDC自身が分轄主義をとっていることが、こういう作業の場合、非常に難しくしているのではないでしょうか。江戸時代の人など見ますと、たとえばお殿様が文芸人であり、狂歌師であり、絵師でもあるというようなものを、どう評価するかという、それぞれの主題を研究する人の評価の問題ですね。ですから、それだけに、主題で切るとか年代で切るとかするのは、あまり得策でないと考えられます。これは、分類表だけの問題ではないでしょうね。たとえば、文学者の場合、289にも入っておれば、9門のいくつかに入っている場合と両方にあるわけです。あるいは、科学者は科学になければならないし。

石山 でも、個人の伝記は、一応いっしょですね。哲学とか文学は違うけれど、分類はその辺まで、個人の伝記は289に入れるけれども。

資料源のこと——図書の場合

丸山 森さん、資料源として、一番そのたよりにしなければならなかったものは、私の場合、資料不足だから、どうしても、帝国図書館の目録からアプローチして行って、それからさぐって行ったわけですけれど、そのほかに、何としても、私の場合は、たとえ

ば、八木さんたちがやった『著者別書目集覧』⁽²⁹⁾、あれをまねたんですよ。あれには、略歴が出ていて、しかもその刊行された文献が年代順に並んでいて、その上、その版との区別、そういうことを調べるたよりになったわけです。ああいったバイオ・ビブリオグラフィは、日本ではあまりないわけで、ただ先ほど、森さんもおっしゃったように、不完全なものにたよるわけです。私は、帝国図書館の目録からアプローチしていったのですが、あれは書名でしょう。ですから、全部はじめから、終りまで調べてゆかなければならなかった。たとえば、モリタケンならモリタケン、イヌカイならイヌカイと。この間に今度感じたのですが、出版年が出てないし、発行年も出てないし、それから、ページネーションも出てないし、こういう日本の代表的な目録でありながら、根本的には書誌的事項が不十分ですね。日本の図書館行政のそういう欠陥というのも、戦後はよくなりましたけれども、戦前の部分を調べる場合には、よい目録はないですね。やはり、国会図書館にお願いしてということになりますね。明治・江戸でも著者で引けるような目録を作ってもらえるとありがたいと思います。

森 同感ですね。今度明治編⁽³⁰⁾をやっておられるけれど、あれを早くやってもらって、大正編に入ってほしいですね。それから、昭和10年代までの分を再編成してほしいと思いますね。もちろん、それは私の方は書名でいい

ですけど。

調べ方で困りますね。あの旧仮名遣いというものがないと。教育がケウイクでないでてこない。そういうことで、あの目録が使いにくくなっている。私どもの年令だって、あぶないのでから、大学生では、とても使いこなせないでしょう。その上、刊行所というのが必要ですが、それがいっさいないということもある。それから案外除籍が多い。そこで捜査の糸がブツリ切れている。もう一度再編成して、これだけは必ず持っているということ、まあ、現代の表記で作っていただけならありがたいと思います。

丸山 私最近、『釣魚大全』という本を調べてみて、テウギョで引かないと出てこないんですね。目録の作成年代によって、使いわけなければならぬですよ。歴史的仮名遣いと現代式との違いを飲みこんで使いわけますね。

森 来館すれば、カード目録ではちゃんと現代仮名遣いで編成してある中で探せるんですから、ぜひお願いしたいと思います。

丸山 古い図書館は、新しい分類規則があって、それでやっているんですが、過去のものをどうするかということがあって、東大にせよ、早稲田・慶応にしろ、一番困っているのは、過去の資料の再編成がなかなかできませんですね。その意味で、国会図書館でぜひ先鞭をつけていただきたい。

森 私の方の作業では、明治編がで

きまして、大助かりしました。大正期が穴になります。『出版年鑑』⁽³¹⁾が出た年次から、これによりましたが、だいたいこれは再版なんかそのまま入っているんで、それは国会のものでチェックして刊行年を調べています。戦後『全日本出版物総目録』⁽³²⁾が、しばらく、自館では所蔵していませんが、収録していた、あの方式がくずれてしまって、残念に思っていますが、ああいふ形式のものは、確かに出版量も増えましたし、ああいふことは大変なことはよくわかっていますが、年次と実際の刊行と、その間は何か別のもので埋めるものがあるならば、あの形式に戻していただけないかと思います。

資料源のこと——雑誌論文の場合

石山 雑誌論文についてはどうですか。

森 国会がこれだけの期間、これだけの量の雑誌記事索引⁽³³⁾を続けているということは、大変な業績だと思います。

戦前だと、歴史関係の文献を探すとすれば、大塚史学会の目録⁽³⁴⁾がひとつあります。それから、筑波家⁽³⁵⁾ですか、あれはずっと戦争末期まで続いている。戦後は史学会が、『史学文献目録』⁽³⁶⁾を昭和25年まで5年分、そして以後は『史学雑誌』等の文献速報と断続的に続いているんですが、一貫してはいないんですね。

ただし、使うということになると、

雑索というのはなかなか技術が必要です。ときどきに編集方針の変更があるので、気をつけてないと、個人の伝記がまとまっていると思っていたら、そうでもない、個人の件名になっていることもあるというわけで、あわてて見直すこともあります。困りはしますが、しかしあればとにかく使うことができますから。これは検討してほしいのですが、自然科学系統は月刊でも結構ですが、やはり年4回の季刊ぐらいにさせていただくと、人文系では使いやすいのではないかと思います。

丸山 年1回でもね。むしろキュームレートが大切ですからね。それから、人物文献の資料源としては、『愛書趣味』臨時号の「追悼誌文献篇」⁽³⁷⁾なども役立ちますね。

森 速報することに意味があるのか、集めることに意味があるかは、どっちの比重が大切かということでしょうが、速報に関しては、あまり気をお使いにならなくていいのではないのでしょうか。諸雑誌に文献集が出ていますし、あることを専攻すれば、あるルートができますから、なんとなく情報が集まってくると思いますし、そういうものと競合しないで、もっと実質的なものにしていただく方がありがたいのですが。

伊藤 今度はやはり、ずっとはじめからお使いになったのですか。必要なところをチェックして。

森 そうです。分担しまして、カード化しました。だから、ある年次で見

せて、やり方を教えると、そんなものは載っていないと苦情が出たりしますので、改めて凡例などみると、何年から編集方針を改めたということですね。

丸山 そのカードですね。まず原稿の段階でカード化する際、いろんな参考書から引っばってくるんですが、自分の方ではこういう題目とこういう項目をチェックするんだということを決めておくんですね。その場合、欠けているところは、現物を見にいつてくるわけですか。

森 そうです。あるいは問い合わせして、ともかく慣れない素人の学生を主体としてやりましたから、改めてカードに排列しようとする、50音順にするのに非常に困難が生じまして、編成に苦しみました。それが、二次文献を主にやりましたから、同じ人の同じ文献について、いろんなカードが出てくるんです。

切り取りのうらめしさ

丸山 私の場合、東大法学部の明治文庫に行って、たとえば、福沢の研究文献だけ集めようと思ったときに、ある人が何年何月何日に書いたということ、やっとなら二次文献で知った場合でも、そこがたまたま切り抜かれたりしてない場合があります、がっかりしました。

森 ありますね。こちらのことになりますが、書名のカードでない。念の

ため著者名でひくと入っている。あるいは、両方になくて件名に入っている。あれは、やっぱり、閲覧者の問題もあるでしょうね。

伊藤 往々あるんですよ。

森 私も出納にいました時に、閲覧者がカードを持って来まして、この本を出してくれ、これはどうなさったんですか、と聞くと、ハリガネを抜いて取って来たんだとおっしゃるんで、あわてて、返しておいたことがあります。

丸山 利用者のそういうオリエンテーションということは必要で、私の方でも、そういうことがあるんですね。

石山 ち切っちゃう人がいるんです。

森 相手に使わせないため、そういうことをするんでしょうか。

伊藤 われわれの方で、新収本の場合は、克明に編成担当者に連絡しています。

石山 結局、冊子化せざるを得ないでしょうね。

人物索引と利用のうらづけ

森 私どものやっている仕事を、利用のうらづけがあるかということになりますと、非常に寒々としたことになるとは、ですから、こちらの人物文献索引が利用のうらづけが確実にあるということは、非常に高い評価ができると思います。私はやはり、ある図書館で、『国書総目録』⁽³⁸⁾みたいなも

のを考えないかといわれたんですが、これは、一私学でできることではないので。『国書総目録』は、それはそれなりに欠点があるといいますが、重要な資料になる、利用のうらづけを背に持っている。ああいう編成だからだと思います。まあ、この国会の仕事というのは、ここにあるはずなんですから、非常に心強く、利用させていただきましたが。

丸山 この『人物文献索引』には、上野時代の伝記の部分も含まれているわけなんでしょうか。明治何年とか。

住谷 明治から以降は入っています。人文編には入っていないんですが、他の2編には入っています。

丸山 ああ、そうですか。さっき、私が申し上げたんですが、著者名ですべての図書をひくようにするということは、まったくいろんな意味の条件からいって不可能の場合でしたが、今度、企画あるときに、できるだけそういう明治・大正のところまで入れてもらいたいと思います。どうしても、古いところを持っているという研究機関になると、限られてしまいます。それだけに、どうしても、そういうものを探索できませんから。

森 やはり、これだけの資料をお持ちになっているところは、ほかにないですから。これをさらに積み上げていくことも重要ですし、抜けている部分を補充して行くことも重要であると思います。非常に。

丸山 それから、各研究室とか、東

大とか県立図書館でも、こういう「伝記目録」というか、人物文献目録を1冊にして出されるところが多くなりました。社史とか、労働組合運動をやった人とか、そういう関係者の伝記資料を集めているところもありますけれど中味を検討してみますと、やはり、収録期間の点で問題がありますね。明治・大正の分がなくて、結局戦後、自館のもっているところを作るだけで、お互の協力で重複が調整できず、せっかく作ってくれているのを悪いのですけれど、自分の図書館のかわりに作ってくれたという感じがしますね。

やっぱり、やっていただくのは、こういう国会図書館でなくては立派なものができないから、資料のあるところでやっていただくのが、いいのではないですか。

朝倉 上野の参考課で、明治以後の単行本の伝記目録³⁹⁾というものを作ったことがあるんですよ。あれをやったときは、本に肖像が入っているかどうか書いたのですが、それから来朝外人のカード目録も作りましたよ。

森 そういうものがあるならば、ぜひ、世に出していただきたいと思います。

丸山 外国の索引の場合ですが、雑誌記事索引なんかを見ますと、ソーシャル・サイエンスとか、ヒューマニティとか、ナチュラル・サイエンスとかそんな3つ位のある程度大きな分野によって人物なりを集めているようですが、その位のおおまかの方が利用者の

立場からすれば、いいんじゃないでしょうかね。『雑誌記事索引』なんか見えていて、伝記という項目があったり、それから各主題の芸術家なら芸術に入れるとか、文学者ならば文学に入れるとなると、それが分散してしまふ。検索するうえから、2・3ヵ所ひくようになると思うんですね。その点は、いかがでしょう。

石山 私は直接かかわっていないので、なんともいえないけれど。まあ、本当は伝記の部としてひとつのグループの方がいいと思いますね。

丸山 伝記とか、著作目録とか、そういうものはやっぱり人物研究のもとになりますから、引きやすく工夫していただきたいですね。

『大正過去帳』のこと

伊藤 話が違いますが、さっきはじめの方でお話が出たんですが、丸山さんの『大正過去帳』の調査方法というか、素材の収集方法は、だいたいどんなことなんですか。

丸山 それはですね、国会図書館の方も関係なさっているのですが、少しさしさわりがあるんですが。一応は、新聞に載った訃報を集めようということ、私は何々新聞、だれさんは何々新聞と分担し、元年から15年までやろうということにして出発したわけです。

石山 明治の分と、大正の分とでは、中味がだいぶ違いますね。

丸山 そうですね。

石山 それはまあ、できた時が違うから仕方がないですね。ところで、たくさんお集めになったでしょうね。

丸山 大正で4,000人位でしょうね。

伊藤 中央紙を中心にしたんですか。

丸山 そうです。大阪と東京とに分けてやりました。はじめは、私が『日本古書通信』に書いたように、時刻表のように、正確、詳細なものにしようというわけで、これはどこの記事からと、出典を明らかにしようということまで主張したんですけれど、やっぱりグループになるといろいろあるし、また出版社の方の意向もあったりして、だんだんそういう風な主張は後退し、あのようになりました。

難しい没年などの判定

朝倉 新聞によって、没日が違うなんていう例もあるんじゃないですか。

丸山 そうですね。「昨夕7時死亡……」という昨夕の記事の解釈をめぐる、執筆者が月日をとりちがえるケースも、あるのではないかと思います。私は、人名辞典で一覧して、大和田建樹や馬場辰猪なんかのことを、『図書館雑誌』に例としてあげたんですが⁽⁴⁰⁾、とにかく、2回死んだり、3回死んだり、4回死んだりしている例が多々あるのは、そういうわけではないでしょうかね。

昨夕とか昨夜とかいうのが、その新聞の記事の発行日から見ると、昨夜と

いうのだったら、5月3日と書いてあったら5月2日とし、その操作によって、こういうミスができるのかも知れませんしね。

石山 そういふのは外国の例にもありますね。ふたつならふたつの系統があつてね。最近も『シナ図説』を書いたキルヘル (Athanasius Kircher) について調べたら、1601年誕生説と1602年誕生説があつて、参考図書類にそれぞれ系統をなしています。

丸山 私もチューサーの没年を調べてみたんですが、『オックスフォード・コンパニオン・ツウ・イングリッシュ・リタレチュア』⁽⁴¹⁾、カッセルの『エンサイクロペディア・オブ・リタレチュア』⁽⁴²⁾などを比較してみると、やはり違いますね。〔?〕をわざわざつけているものもあるし。

石山 つけてないものもあるし、断定的にやっているものもあるし。やはり〔?〕をつけておいた方が、それだけでもよいですね。ここまではわかったというところがわかって、良心的ですね。そうかといって、生年や没年を空欄にされても困るじね。

丸山 読み方なんかも、そういう点があります。わかったところや、自分で調べたところなら、こういう風に読む、こういう風にも読む位なことをつけておいてもよさそうなんです、やはり、こう発表するときのグループなり、編集者なりの見識によって、こういう風に統一してしまうという暗黙の了解のようなものが書いていないで

すね。比較的。

石山 その意味では、丸山さんの福沢書誌というのは、非常にていねいですね。

正字と略字

朝倉 名前の場合には、本当のとこいえば正字でいかなければならないんですが、このごろみなめんどろなので、略字でいっていますね。この点も、問題にすれば問題になりますね。

丸山 私も福沢の「沢」という字を、正字の「澤」ではなくて、略字の「沢」にしたんですが、あれは、一応私の師で監修者になっていただいた富田先生に相談したわけですが、今の時代に「沢」という字位はあわせてもいいのではないかと、そこまで厳密にいったら大変なことで、印刷屋泣かせになるのではないかと、とさとされました。

朝倉 でも「藝」という字はちょっと困りますね。「芸」だと、ウンだから、「ウンアン（芸庵）」というのがあるんだから。「ゲイアン（藝庵）」では困りますね。

森 それは確かにありますね。こちらでも当用漢字をもってあてるということを原則にたてたんですが、いわゆる正字の問題は出てくるんですね。

要するに、いま出た「藝」を機械的に「芸」に直したりしてよいものかどうか。標目はそれでたてられるんですが、結局二次文献なんかを主体に集めた弱みで、論文がどうなっているか確

認できないわけで、そのため思い切って当用漢字がある限りは当用漢字で機械的に振り直してしまおう。それからのみ出し字は、正字で入れるということにしました。それから、かなづかいの問題があります。

人名のつづりと読み

丸山 石山さんは整理畑なんですが、私はタイトルページなんかの部分でも、そういうことがよくあるのではないかと思いますが、どうですか。

石山 今、書名だけは忠実に、標目になる個人名は直してしまうというようにことをしていますが、まあ、なかなか難しい問題ですね。外国人名辞典なんかの場合でも、たとえば、メルカトールなんかは、オランダ語のつづりでは Gerhard Kremer、フランス語では Gerard de Cremer、ラテン語つづりでは Gerardus Mercator と、それぞれの場合で違うわけですね。むこうの百科事典にも同様な難しさがありますね。日本だけの問題ではないという気がするんですがね。

朝倉 しかし、日本は読み方が困るんですよ。

石山 そうですね。ローマ字と漢字、標音文字と標意文字で違いますね。コンピュータでやってもよいのだけれど、コンピュータにのせるまでが大変なんです。その基礎資料ができていないでしょう。

丸山 原敬なんかは、ケイと読むの

か、タカシと読むのか、犬養だって、ツヨシだか、コワシとか、キだかとなると、どうにもならないですね。これは犬養の場合ですが、『福沢諭吉とその門下書誌』を調べている時、ツヨシなのか、コワシなのか、キなのかわからなかったので、富田先生に読み方を聞いたところ、ちょうど昭和7年が慶応義塾の創立75年であったのですがその式典に文部大臣として彼がやって来て、祝辞を読んだそうです。そのとき、富田先生が出席していたので、耳をそばたてて最後の結びで、犬養なんと読むかと聞いていたら、キと読んだそうです。しかし、犬養のおやじは、コワシと名付けたそうです。実際こんな例は、難しいひとつですね。

石山 そういうことができる場合は、いいけれど。

森 本当に正確というの、わからないのではないかしら。平凡社の人名事典をつくる時、どうやって決めたのか、異なる読み方が数種でてきても、どれも間違いともいえないしねえ。

石山 漢字の字画順というの、索引に必要ですね。

朝倉 原敬はどう読むんですか。

住谷 タカシですね。いろいろあるんですが、うちは平凡社からとった場合は平凡社と入れておいて、最後に調整したわけです。遺族に聞いて、タカシであると。たとえば、『議會制度七十年史』の衆参の議員名鑑⁽⁴³⁾では、これこれと注して、最後に多少の調整は

したんですね。

石山 だけれど、菊地寛は、カンで通ったから、自分で通しちゃったとか。

森 地方に問い合わせたとき、当方もわかりかねますという返事や、ごく普通にお読みくださって結構ですという返事がきたこともあります、わかりますね。

石山 欧文の論文でも書いていけば、署名のローマナイズでわかるんですね。

丸山 そういう例はいろいろありますね。以前に慶応の図書館長だった野村兼太郎教授は、自分は親からつけてもらったのはカネタロウというんですが、世間の人はケンさんとか、カネさんと呼ぶんで、自分ではカネタロウと思っていたけれど、あまりに皆がケンタロウと呼ぶんで、最後には「ケンタロウにしたよ」といっておられたという話です。

実際には、通称とのかねあいもありますからね。私としては、こういう読み方もあるということ、人名辞典を編集する時に書いておいていただいてもよいのではないかと、考えているんですが。

石山 ほんとうに典拠を明らかにできると良いですね。ただ、スペースの点も問題になりますね。典拠文献を一括して巻末に挙げ、文献番号で本文中には指示した岩波の『近代日本総合年表』⁽⁴⁴⁾のようなやり方もあるし。

丸山 そこまで、できる人とできない人もありますね。全部の人がそのよ

うにいろいろな読み方がある場合、全部の読み方が調べつく場合はできるんですが、やはり『大正過去帳』をやってみても、はじめからやろうとってはいても、現実問題ではなかなか。

鈴木 人名に関連して、たとえば広重、蕪村など、姓をつけないで呼ぶことが多いのですが、これらの扱い方も難しいですね。

森 相互に参照をつけるほかないですね。

それに、それぞれの分野の専門家にその分野での道具を作っていただきたいものです。

きわめつけの難しさ

鈴木 道具の不足ということは、皆さんの悩みでもあり、われわれの悩みでもありますね。不足のところを、他に求めるわけですが、どのようにカバーしていくかということは問題です。その意味では、事実文献類が上ってきますね。最近では、森銑三さんの『近世文芸家資料綜覧』⁽⁴⁵⁾などがあります。

森 道具がないといっても、どうしても何かの形できわめをつけなければ排列が決まらないのですから、その辺は困りましたね。どうしても読めないものは、標準的なもので読むとか、あるいは音で読むとすとかしてしまいましたけど。ですから、同一人でこのために数ヶ所に載ることになるかもしれないことは、予想されます。

丸山さんの方は、きわめつけの道具のないところは、どうされましたか。

丸山 やはり、音で読むとか、機械的に考えざるを得なかったですね。遺族のところへ手紙を出したりして、努力はしたんですが。

手がかりとしての人物文献索引

熊田 私が思うんですが、日本ではこうして、人物文献索引という形で出されましたが、少くともヨーロッパでは、あまりインデックスというものは少ないのではないのでしょうか。

石山 要するに、文献目録だけというのは少ないですね。

熊田 人物だけというように限られていることにも、ひとつ問題があると思うのですが。イギリスを例にとりますと、ある人物を探そうとすると、ある特定の主題、地域などについての書誌がかなりできていて、その中に人物が含まれているというような形が非常に多いわけです。

特に、人物というのは、必ず歴史的なバック・グラウンドを持っているわけですから、この点は重要なことだと思えますね。

私どもの作った索引は、作成にあたっては、まず固有な人物が、ある書物のタイトルにあらわれてくるか、あるいはサブタイトルの中にあらわれてくるかを、まず基準にしたわけです。そうすると、私どもの索引は、まったく不完全なものであって、むしろ、これ

はガイド・ブックであると考えているわけですね。具体的な例として、最近の例なんですけど、私どもの人物文献索引に1点しかあがっていない人物について、いろいろ詳しいことが知りたいということになりますと、その人の活動した分野から、いろんなツールというのは、たくさんかくされておられ、その意味でも、完全を期してもまったく完全ということではできないわけですね。『人物文献索引』というのは、あくまでも各分野の目録・書誌が不足しているということからきている日本的なものとも思われますね。

石山 一般的に書誌が不足しているということも、一因していますね。

安積 人物そのものに非常に興味を持っているという点が、日本的なことではないですか。

石山 ここ数年、ニューヨーク・タイムズのブック・レビューその他の外国の書評紙を読んで来ていますが、書評の対象になるものに、伝記が非常に多くなっていますね。ベストセラーズの中にも、ノンフィクションとしていくつかは伝記が出てくるという状態なわけですね。日本では、最近は歴史ブームもありますけれど、日本とは違っていますね。

安積 伝記というのと、いま考えている人物文献というのは、ちょっと微妙なずれがあるのではないですか。この点、とくに社会科学部門では、らんぼうな言い方をすると、人物に興味があるのではなくして、そのバック・グ

ラウンドに興味があるという例が多いのではないのでしょうか。

石山 要するに手がかりなわけですね。レファレンスの場合でも、たとえば、ある事件を調べるためにも、その中のあるひとりの人間を探して手がかりにするというのも、ひとつの方法ですね。その手がかりとしても、意味がありますね。

安積 この意味で、いま熊田さんがおっしゃられたように、第1次的などうか、ひとつの手がかりの資料として作成されたということにもなりましようね。

熊田 私どもの法律・政治編が対象にしたものは、明治以降に作成されたものに限られますし、対象者も日本人について明治以降の人に限定されているよりも、むしろかなりその人物を顕彰するという立場から書かれたものが比較的に多いですね。見方によっても違いますが、その人物を客観的に位置づけようとする方向は、雑誌論文には出てくるかも知れませんが、個々の本には出にくいというような点があります。日本における伝記の存在がこうなっているというのも、違った意味があるのでしょうか。

外国の場合、必ずしも人物に全面的に共感的な立場から書かれたものには限らず、その点、人物というものの見方が違うのではないかと。

こういう意味では、『人物文献索引』などを手がかりとして、個々の最も完

全なものができたり、あるいは、個々の図書や雑誌論文の後には、必ず文献の目録をつけてくれるというような風潮も出て来てくれるとありがたいですね。

おわりに

安積 そろそろ時間も迫っておりますので、最後に、これから必要な方向とか、いままでの経験から必要と思われたことなど、お話しねがいたいと思います。

森 どうでしょうね。人名辞典ではなくて、人名便覧をどこかで作ってはくれないかしら。何をしたかという物語的な記載はいっさいなしにして、読み方はなん通りがある。全部列記したってかまわない。何辞典にはこう載っている、あるいはきわめつけられるのだったら、きわめつけをしておく。それから、生没年、必要な業績。あとは、業績、著書があれば書名を列記する。たとえば、太閤秀吉が偉くて、何をしたかなどということは、本を見ればわかるんですから、文献目録のうらづけがあれば、そういう便覧の方が、中間として便利ではないかと思うんです。『漢学者伝記及著述集覧』⁽⁴⁶⁾のような風なものを、もっと開発したらどうだろうか。それがあって、はじめて正確な人名辞典に進むのではないかしら。ぜひ、これをどこかで、大正の蔵書目録が終ったら、つぎにやりませんか。部分部分はすでに刊行されたもの

もあるのですから。

また一方、各分野で責任あるものを編成して、人名の呼び方や、用語の標準化を計ってほしいものです。文学・仏教の各宗派のものなど、ぜひほしいと思っているのです。

それと、注文ばかりになりますか、叢伝・列伝類の分轄をして、索引を作っていただけないものか。人物文献では、その部門の人しか出てきません。各冊で同じ本を見ながら、部分部分しか出さないのは、労力が無駄ですし、総合的なものをほしいのです。そして、現在の既刊分の被伝者総索引を編成して下さい。各冊に同一人物が出ていて、収載文献の違うこともありますし、利用者側からすれば大変ありがたいと思います。まとめという意味あいにもなるとは思います。

また、館の運営方針にかかわることですが、収書を網羅的にすることを計画していただけないでしょうか。過去の分にも個人出版物等ずい分ないものがあります。納本制度があったのですから、本来ありえないはずですが。また、最近では納本率が下がっていると聞きます。それも学振図書のような発行部数が少なく、個人で入手できないような単価の高いものほど、入っていないようです。逆にそういうものほど図書館にあるべきだと思いますが、この点方法はないものでしょうか。

それと先ほども、雑索のことも申しましたが、雑索の編集方針もときどき変更があります。そのほか、総合目

録の編集方針等、重要な業務上の変更がしばしばあります。多少のことであっても、できるだけ変更・改正は少なくしてほしいものです。とくに雑誌の誌名は困却しています。『和雑誌目録稿』と毎年の逐次刊行物目録とでは、同一誌で、異なるものが少なくありませんね。

丸山 伝記文献や人物文献は、どんな調査研究においても基本的な資料ですから、現在おこなわれている「人物索引」を、ぜひ、各方面の要望を調査して、利用者の使いよいに編集に工夫をこらして、継続的に刊行していただきたいものですね。

国会の『人物文献索引』のいままでの3冊のうち、とくに経済・社会編と法律・政治編を一本にして、「社会科学編」とされたらいかがでしょう。

この種の索引の作成のご苦労、困難さについては、これまでの座談の中で、いろいろな面を皆さんが事例としてあげられましたが、私は、結局、ポイントとしてつぎのようなことがいえると思うんです。

まず、人名の採録の状況ですね。

つぎに、没年、生年月日も含めて、記事の正確さが重要です。よく、1冊の本から孫引きされるもので、オリジナルになっているものにミスがあると全部あやまってしまう可能性があります。必ず、2組かそれ以上の参考書を対照する必要がありますね。氏名の読み方については、いま森さんがいわれたように、「人名便覧」が確かに必要

です。ちょうど、発音辞典のように、ひとりの人の読み方は、いく通りにも読まれるので、それらを網羅したものがほしいですね。

また、雅号、襲名者一覧、ペンネーム便覧なども、同様に必要でしょうね。

最後に、できれば、人物書誌作成マニュアル（便覧）のようなものが編集されると便利ですし、後学者のためになると感じますね。

石山 いま最後に丸山さんがいわれた、マニュアルの例として、アメリカ議会図書館には、『ビブリオグラフィカル・プロセデュア・アンド・スタイル』⁽⁴⁷⁾というのが、1954年にできてますが、国会図書館でも考えてみてもらいたいと思います。

いままでのいろいろなご注意やご忠告を、単に人物索引の問題だけとしてではなく、国会図書館の目録・書誌作成の上で、広く生かすようにしたいものです。

安積 それでは、このへんで終りにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(昭和48年5月19日当館にて)

文責 編集委員会)

文献注

- (1) 国立国会図書館参考書誌部編『人物文献索引』国立国会図書館 3冊
人文編 昭和42 388p 昭和20—39年刊行分
経済・社会編 昭和44 283p 明治以降—昭和43年刊行分 清和堂書店(発売)

¥1,900

法律・政治編 昭和47 397p. 明治以降—昭和46年刊行分 日本図書館協会(発売) ¥5,400

(2) 法政大学史学研究室編『日本人物文献目録』平凡社 四六倍判 約1,200p.

<刊行予定>

(3) 日本学術会議 第1部編『文科系文献目録』XIV 日本近代史・伝記篇 日本学術会議 昭和38 65p.

(4) 東京市立日比谷図書館編『伝記資料索引』東京市役所 昭和3—13 5冊

(5) 高梨光司編『維新史籍 解題 伝記編』明治書院 昭和10 13, 17, 342p.

(6) 林亮勝・村上直共編「明治以降 伝記書総目録」『日本歴史』第138号 pp.70—120 昭和34.12

(7) 東京大学経済学部 研究室編『東京大学経済学部研究室所蔵社史・実業家 伝記目録』東京大学経済学部 昭和39 321p. (和書主題別目録1)

東京大学経済学部編『東京大学経済学部所蔵社史・実業家 伝記目録』東京大学経済学部 昭和45 124p. (和書主題別目録8)

一橋大学産業経済研究所資料室編『本邦企業者史目録』昭和44 127p. (特殊文献目録3)

(8) 丸山信編『慶応義塾 文献集 慶応義塾創立百年記念』慶応義塾 生活協同組合 昭和33 A 5 123p.

(9) 『慶応義塾 百年史』付録 昭和44 548p. 図版

(10) 富田正文 監修・丸山信編『福沢諭吉とその門下書誌』慶応通信 昭和45 274p.

(11) 『慶応義塾姓名録』第1号—第29号 28冊 人名索引 1冊 文久3年春—明治34年11月

(12) 成瀬礼三郎編『銅版絵本 近世英名百首 伝』明治14 袖珍版 50丁

(13) 大植四郎編『国民 過去帳』明治之巻 尚古房 昭和10 私家版 1264p.

(14) 大植四郎編『明治 過去帳 物故人名辞典』新訂版 東京美術 昭和46 1264p. ¥15,000

(15) 稻村徹元・井門寛・丸山信共編『大正 過去帳 物故人名辞典』東京美術 昭和48 1冊 ¥4,800

(16) 木村巽斎『兼葭堂日記』〔大阪〕兼葭堂日記刊行会(中尾松泉堂書店) 昭和47 6冊(解説共) 31cm 和 羽間文庫蔵本の複製 解説(水田紀久著 別図59p. 21cm) 映入 箱入 カバー付 限定版 翻刻編他にあり

(17) 平凡社『大人名事典』昭和28—30 10冊

(18) 『大日本人名辞典』新訂版 同刊行

(19) 芳賀矢一『日本人名辞典』大倉書店 大正3 1174p.

会編 昭和12 5冊

(20) 河出書房新社『日本歴史大辞典』昭和31—35 24冊 (別巻共)

(21) 鷺尾順敬編『日本仏家人名辞書』増訂3版 東京美術 昭和44 本文364, 1319, 181p.

(22) 大塚武松編『百官履歴』上・下巻 日本史籍協会 昭和2—3 2冊

(23) 江戸のは『江戸当時 諸家人名録』(文化12年, 文政元年)『江戸現在 広益諸家人名録』(天保7年, 同13年, 文久元年), 京都のは『平安人物志』(明和5年, 安永4年, 天明2年, 文化10年, 文政5年, 同13年, 天保9年, 嘉永5年, 慶応3年), 大阪のは『浪華郷友録』(寛政2年, 安永4年, 文政6年), 『新刻浪華人物志』(文政7年), 『浪花当時人名録』(嘉永元年)『浪華名流記』(弘化2年, 安政3年)な

- ど。
- 24 江戸時代の大名や旗本などの 武家の姓名, 系譜, 所領, 紋所などを記載。慣例として毎年改訂。
- 25 矢島玄亮編『本館所蔵人名辞書類 総目録 (予備版) 一和漢書一』 東北大学附属図書館 昭和41 155p. 昭和39年現在 (参考資料第69号) 謄写版
- 26 丸山信「書誌案内(4) 人物篇(日本)」『日本古書通信』昭和43年4月号 pp. 16—17.
- 27 Winchell, C. M., *Guide to Reference Books*. 5th ed. Chicago, American Library Association, 1967, 741p.
- 28 たとえば, 前掲書 pp. 167—190 参照。
- 29 川島五三郎・八木福次郎共編『著者別書目集覧』 六甲書房 昭和19 291p. 14×19cm
同『著者別書目集覧 近代作家の80人』 八木書店 昭和34 537p. 13×19cm
- 30 国立国会図書館 整理部編『国立国会図書館所蔵明治期刊行 図書目録』 国立国会図書館 紀伊国屋書店 (発売)
第1巻 哲学・宗教・歴史・地理の部 昭和46 1009p. ㊦4,500
第2巻 政治・法律・社会・経済産業・統計・教育・兵事の部 昭和47 890p. ㊦3,800
第3巻 自然科学・医学・農学・工学・家事・芸術・体育・諸芸の部 昭和48 863p. ㊦5,300 (以下続刊)
- 31 『東京書籍商組合 図書総目録』 同組合 明治26—昭和15 9冊
『出版年鑑』 1926—28年版 国際思潮研究会 3冊
昭和4—15年版 東京書籍商組合 12冊
昭和5—16年版 東京堂 12冊
- 『書籍年鑑』 昭和17年版 協同出版社 昭和17 1冊
『日本出版年鑑』 昭和18年版 協同出版社 昭和18 1冊
昭和19—21年版, 昭和22—23年版 日本出版共同 昭和22—23 2冊
『出版年鑑』 1950年版 出版ニュース社 昭和26—
- 32 国立国会図書館編『全日本出版物総目録』 昭和23年版— 国立国会図書館 昭和26—
- 33 『雑誌記事索引』 国立国会図書館 人文科学編 1巻1号—17巻12号 (昭和23年9月—昭和39年12月)
人文・社会編 18巻1号 (昭和40年1月) —
自然科学編 1巻1号—15巻12号 (昭和25年1月—昭和39年12月)
科学技術編 16巻1号 (昭和40年1月) —
- 34 大塚史学会編『綜合国史論文要目』 刀江書院 昭和14 627p.
- 35 筑波家国史 研究部編『国史学界』 昭和4—18年 昭和5—20 15冊
- 36 史学会編『史学文献目録』 1946—1950 再版 山川出版社 昭和27 204p.
- 37 「追悼誌文献篇」『愛書趣味』臨時号 昭和7年8月, 9月
- 38 『国書総目録』 岩波書店 昭和38—47 8冊
- 39 カード。未刊。
- 40 丸山信 <参考図書ABC> (4) — 「人名録」「人名事典」の比較 『図書館雑誌』 62巻9号 pp. 420—423 昭和43年9月
- 41 Hart, James David, *The Oxford companion to American literature*. 4th ed. Maruzen Asian ed. New York, Oxford University Press; Tokyo,

- Maruzen [1965, c1956] 991p
 (42) *Cassell's encyclopaedia of literature.*
 Edited by S.H. Steinberg. London,
 Cassell [1953] 2v.
 (43) 『議會制度七十年史』 衆議院・参議院
 共編 大蔵省印刷局
 貴族院・参議院議員名鑑 昭和35 337p.
 衆議院議員名鑑 昭和37 566p.
 (44) 『近代日本総合年表』 岩波書店編集部
 編 岩波書店 昭和43 461,78p.
 (45) 森銚三等編 『近世文芸家資料綜覧』 東

- 京堂出版 昭和48 200p.
 (46) 小川貫道編 『漢学者伝記及著述集覧』
 名著刊行会 昭和45 781,12p.
 (47) U.S. Library of Congress, General
 Reference and Bibliography Division,
*Bibliographical procedures & style; a
 manual for bibliographers in the Li-
 brary of Congress.* by B.P. Mc Crum
 and H.D. Jones, Washington, 1954,
 reprinted 1966, 133p.

レファレンス事例

本山荻舟の著書とプロフィール (個人)

〔回答〕

当館所蔵の著書を、刊年順に列記します。

近世数奇伝 金桜堂書店・文正堂書店

大10

続近世数奇伝 金桜堂 大10

田舎源氏 源氏会 大10

日蓮 光華堂 大11 (大14 報知新聞社
 刊)

続近世剣客伝 報知新聞社 大12

宮本武蔵 外13 春陽堂 大13

(読物文芸叢書第3)

名人崎人 前後編 2冊 至玄堂 大8
 ~15 (昭46 桃源社復刊)

同 改訂版・前編 至玄堂 大15

一刀流物語 東洋出版社 大15

江戸前新巷談 大阪・波屋書店 大15

戦国余情 騒人社 昭2

維新外史 公武合体篇 至玄社 昭3

美味廻国 四条書房 昭6

義人群像 四条書房 昭7

板前隨筆 岡倉書房 昭10

日本食養道 実業之日本社 昭13

飲食系図 関書院 昭23

舌の虫干し 朝日新聞社 昭25

荻舟食談 住吉書店 昭28

小唄入門 杉原残華と共著 住吉書房
 昭29 (昭33 東京邦楽社刊 昭42

柏屋出版部)

一刀流と二刀流 同光社 昭30 (大衆
 小説名作選)

美味はわか家に一荻舟食談 住吉書店
 昭36

近世剣客伝 鱒書房 昭31 (歴史新書)

隨筆的飲食日本史 青蛙房 昭31

飲食事典 平凡社 昭33

美味の遍歴 寺下辰夫著書 鋼書房
 昭34

可美物解題 橋右近選・本山荻舟 解題
 製菓実験社 昭34

大衆文学大系 5 講談社 昭46

内容一前田曙山, 本山荻舟, 平山蘆
 江。本山荻舟集の所収作品は、近世
 数奇伝、一刀流物語、二刀流物語
 プロフィールについては、この大系5巻
 巻末の年譜が参考になるかと思ひます。